

まえがき

今、神から遣わされている学校で、あなたが神のためにできることがあります。そしてそれに参加することで、あなたは今までよりも神を知ることができます。

KGK は、遣わされたキリスト者同士の交わりです。今まで学生として神に従ってきた先輩たちが、その恵みを感謝しながら卒業前に考えたのは、「学内で主に仕えるスピリットを後輩たちに伝えたい」ということでした。その継承の願いが積み重ねられて、現在の KGK 運動につながっています。

KGK のスピリットと働きは、KGK 特有のものではなく、聖書に従うキリスト者が同意するものです。この聖書研究を通して、キリスト者としての日常生活でどのように考え、証しし、歩んでいくのかを確認することができます。それを励まし合うために、ぜひみなさんの学内や近隣の学校の学生たちとともに、KGK 活動を始めてみてください。

このテキストを使った学びを、入学したばかりの新入生たちとともにしたり、卒業を控えた先輩との交わりの中ですることは、豊かな信仰継承になることでしょう。聖書をともに読むことによって、今、神の期待は、ほかならないあなた自身に向けられているという現実気づかされることでしょう。

「私は、『だれを使わそう。だれが、われわれのために行くだろう。』
と言っておられる主の声を聞いた…」イザヤ 6 章 8 節

この声にみなさんが応答することができますように。

Study One

遣わされたからこそ

使徒の働き11章19-26節

この箇所には、聖書ではじめて「キリスト者」と呼ばれた人たちが出てきます。ここから KGK 運動のスピリット「派遣意識」ということについて共に考えていきましょう。

1. 自分から「キリスト者」と自己紹介したのではなく、「キリスト者」と人から呼ばれた人たちとは、どんな人たちだったと思いますか？友人から「やっぱりクリスチャンだねー。」と言われた経験があったら、分かちあってみて下さい。
2. 19節には、ステパノの迫害によってエルサレムにいられなくなった人たちが出てきますが、彼らがユダヤ人以外には御ことばを語らなかつた理由はなぜだと思えますか？
3. 20節に出てくる幾人かのキプロス人、クレネ人は、どうしてアンテオケで主イエスのことを宣べ伝え始めたのでしょうか？（キプロス、クレネはギリシャ語圏です。）迫害が原因で、エルサレムから逃れた時の彼らの心境はどのようなものであったと思えますか？

4. 「主の御手が彼らと共にあったので」とはどういう意味でしょうか？
5. エルサレム教会から派遣されたバルナバ（キプロス出身）は、クリスチャンになったばかりの人たちにどのようなことを語りましたか？
6. 私たちがそれぞれの学校に遣わされている目的は何だと思えますか？それを主から教えられた経験があれば、分かち合ってください。
7. あなたの学内で「心を堅く保って、常に主に留まる」ために、大切なことは何でしょうか？
8. あなた以外によって福音を知ることのない友人はいますか？互いに名前を挙げてその友人のために祈り合いましょう。

➔ That's KGK Movement

KGK の派遣意識とは、全ての KGK 運動の出発点であると言っても過言ではありません。あなたがその学校にいるのは決してあなたの実力や、ましてや運ではありません。神様があなたをその学校に遣わしたのです。ここに神様の計画があります。この神様の計画を受け取り、学内において祈り、御ことばを分かち合う時に KGK 運動が始まります。KGK 運動では、この姿勢を「派遣意識」と呼びます。

神様があなたをその学校に遣わされたのには目的があります。もしあなたの学校の学生証を持たない年配の誰かが、あなたの学内で大胆に福音を伝えたとしても「あなたは一体誰ですか？」と注意されることになるでしょう。しかし学生であるあなたはそこで福音を伝えること

が出来るのです。神様はこの時代に、難しい専門用語ではなく、心に届くあなた自身のことばによって、あなたの友人に福音が伝えられることを願っておられます。キプロス人、クレネ人は、名も無い者であって、著名な伝道者ではありませんでした。彼らは彼らに与えられた賜物（ことば、人格、時間、人間関係）を用いて自分に出来ることをしたのです。「主の御手が彼らと共にあったので」とは、彼らが伝道しようと頑張ったから、主の御手が彼らの上に伸ばされたわけではありません。その場所に遣わされたのは主であり、彼らは信仰は若かったけれども、主からの使命を受け取ったのです。

あなたの学内にもあなたに与えられた賜物でなければ福音を伝えることの出来ない未信者の友人がいるのです。また、そこにはあなたが全生涯をかけて学び、神の栄光を現すためになるべき学問があることでしょう。その全てに真剣に取り組み、あなたの学生生活全体を通して「神が生きておられる」と周囲の人に証しすることをあなたは求められているのです。そして誠実に学生時代を生きるあなたの姿を通して、あなたは「キリスト者」と呼ばれる存在となるのです。

この派遣意識は決して学生時代だけのものではありません。家庭に遣わされ、職場に遣わされ、教会に遣わされるという主の計画を受け取ることは、全生涯に渡ることです。

派遣意識とは、自分の人生を自分で生きるのではなく、神様と共に生きることを始めていくことなのです。

Study Two

福音主義

生きた神のことばと共に

ヘブル人への手紙4章12-16節

ヘブル書は説教原稿であると言われています。その全体を読み進めていくと、この当時のクリスチャンには、あらゆる誤解や偏見、そして迫害があったことが分かります。また目の前にはローマ帝国の繁栄があり、姦淫や不品行の誘惑がクリスチャンを取り囲んでいました。そのような環境の中で、あるクリスチャンたちは信仰生活に疲れ果ててしまい、一緒に集まることをやめて、信仰の交わりから去って行ってしまったこともありました。そして聖書を信じてはいても、神様がいらっしゃるかどうか分からないような生活をしているクリスチャンたちも出てきたのです。そのようなクリスチャンに向かって、ヘブル書の説教者は、イエス・キリストが神であること語り、聖書のことばが生きていることを語ります。

1. あなたには、聖書のことばが生きて自分に働いている、と実感した経験がありますか？それはどのようなものでしたか？
2. ヘブル4章12-13で「神のことばは生きている」とありますが、逆に、神のことばがまるで「死んだことば」のように感じることや、「神のことばが通用しない」と思ってしまう時や場所、人間関係を経験したことがありますか？それはどのようなものですか？
3. 神のことばは「心のいろいろな考えやはかりごとを判別できる」とありますが、神のことばが生きていて「刺し通す」とは、どういうこと

だと思いませんか。

4. KGKスピリットの「福音主義」とは、聖書は生きた神のことばであり誤り無き神のことばである、という告白です。第二テモテ3：14-17を開きましょう。聖書は私たちにとってどのような存在ですか？
5. 13節には「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つない」とあり、「神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されている」とあります。今あなたが学校で学んでいる学問に、聖書の視点を持って取り組むとするならば、どのような勉強となるでしょうか？今までの自分の勉強に対する姿勢は、どのように変化するでしょうか？
6. 14-16節をもう一度読みましょう。私たちが神の子イエス・キリストに対してどのような態度を取ることが求められていますか？
7. あなたの参加している聖書研究会（聖研）において、イエス様がおられるゆえに「信仰の告白を堅く保つこと」とは、聖研がどのようなことでしょうか。また「大胆に恵みの御座に近づく」とは、どのような聖研のことを言うのでしょうか？
8. あなたの学内聖研は今、生きた神のことばを学ぶ場となっていますか？もしそうっていないならば、何が原因なのでしょう？
9. イエス・キリストを信じていない友人が参加しやすい聖研になるためには、何が課題でしょうか？そうなるためにはこれからどうしていけばよいか、自由に話し合ってみてください。

➔ That's KGK Movement

KGKの信仰基準の一番初めに記されているのは、「旧新約聖書六十六巻は、神の選ばれた聖書記者たちによって、神の靈感のもとにしるされた神のことばであって、原典において誤謬を含まず、信仰と生活の唯一の規範である」という告白です。KGKはこの「旧新約聖書66巻は神のことばであり、誤りが無い。そして聖書こそ信仰と生活の唯一の規範である」という中で、KGK運動をしているのです。

かつて福音主義の前に立ち上がったのは、「自由主義」という聖書を神のことばとしない立場でした。自由主義の立場に立つならば、聖書は真剣に信じる対象とはなりません。また、信仰の規範が「聖書+α」となるような「聖書も大切だけど他にも規範になるものがあるよ」という立場（伝承、聖書外典、神秘的な経験を重視する）も過去多く出てきました。しかし福音主義は、「聖書のみ」の原則に立ち続けたのです。

では福音主義信仰の立場に立つ私たちにとって、「聖書は生きた神のことばである」ということは、当たり前のこととなっているのでしょうか。そうではありません。私たちもまた、神のことばが生きている場所と生きていない場所を作ってしまうことが、学校生活の中や、バイト先や、サークル、自分の一人きりで過ごす部屋の中で起こりうるのです。それはまるで「生きた神のことば」への信頼を、自らの生活の中で否定しているかのようです。しかしKGKの福音主義は、聖書が生きた神のことばであることを信じる信仰です。だからこそKGKでは、学生生活の多くを占める学内の只中（教室、部室、食堂）で聖書を読み、聖書研究会を大学内で行うことを選び取っているのです。その場所にも神のことばは生きているという信仰の告白に堅く立っているからです。聖書は決して日曜日だけのものではなく、私たちの日常で、生き生きと私たちの生活を刺し通し、私たちを生活の至るところでイエス・キリストの恵みの御座へと導いてくれるものなのです。

このことは、クリスチャンだけに言えることではありません。KGKがグループで聖書研究会をするのは、まだイエス・キリストを信じていない友人にも、神のことばが生きて働く信仰ゆえです。むしろ未信者の友人が分かち合ってくれるみことばの豊かさは、自分の聖書の読み方を大きく広げてくれさえします。生きたみことばに共に大胆に近づくことによって、福音宣教をなす。これがKGKの伝道のあり方であり、みことばが直接友人に語ることの出来る、力ある伝道なのです。

また、この福音主義に立つとき、私たちは「学問は学問、信仰は

信仰」と、大学で学ぶことと信仰を切り離して考えることが出来なくなります。この世界が神様の創造された世界であることを真剣に信じる時、神様の視点に立って、この世界と歴史を見るようになるのです。これを聖書的世界観、歴史観と呼びます。KGK運動はその意味で「きちんと勉強すること」をもあなたに勧めるのです。

Study Three 超教派

愛によって繋がれている

エペソ人への手紙4章11-16節

KGKのスピリットの「超教派」とは、教派間を超え、教派をないがしろにするものではありません。英語でも Inter-denominational (super-ではない) であり、教派を越えるのではなく、「教派が互いに、教派と共に」という意味があります。その意味ではむしろ「協教派」と言った方が適切かもしれません。さらに別の言い方をすれば、「教会を愛する」スピリットと言い換えることもできるでしょう。今回は「教会とは何か」ということを、教会の書と呼ばれるエペソ書から共に学んでいきたいと思えます。

1. あなたは超教派ということばにどんなイメージを持っていますか？ また、あなたの属している教会の背景（歴史、伝統、大切にしている教理など）を分かちあってください。
2. 11節にあげられたいくつもの職務の共通点は「神のことばを語る」ということです。なぜ「神のことばを語る」働き人が教会に必要なのだと思いますか？ もしこの働きが教会になければ、教会はどうなってしまうと思いますか？
3. 教会の全ての働きは、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げること」とありますが、「聖徒たちを整え、奉仕の働きをさせ」、「キリストのからだを建て上げる」とは、それぞれどう

いう意味でしょうか？

4. 14節では、クリスチャンの交わりにおいて「子ども」「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略」「教えの風に吹きまわされたり、波にもてあそばれたり」という3つの状況があるとパウロは語ります。それぞれどのような状況に陥ることだと思いますか？具体的な例をあげて考えてみましょう。
5. KGKの交わりが14節のような状況に陥らないために、私たちが気をつけなければならないことはどんなことだと思いますか？
6. 「愛をもって真理を語り」「あらゆる点において成長し」「かしらなるキリストに達する」交わりとは、どんな交わりを指していると思いますか？
7. ここでパウロが、クリスチャンの交わりを、キリストをかしらとした「からだ」だと表現していることには、どんな意味があると思いますか？
8. それぞれの学内の交わりが「愛のうちに建てられる」ために、自分は「キリストのからだ」としてどのような部分を担うべきだと思いますか？
9. 今回の聖研を通して、自分は自分の属している（出席している）教会で、どんなことをもって貢献することが出来ると感じましたか？

KGKにおける「超教派」を一言で言うならば、「教会を愛すること」「交わりを愛すること」です。日本人の宗教観の中に「信仰は内側のもの、個人的なもの」という性質があります。しかし、聖書のものの考え方は「我ら」の信仰なのです。神様は「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と神を信じる交わりが生み出されることを求められ、「人は一人でいるのは良くない」と最初の交わりを創造されました。また旧約聖書において神はイスラエルの共同体に語りかけられましたし、イエス・キリストもキリストの弟子の共同体をつくられました。そして私たちが「キリストのからだ」に属することに召されているのです。

ですから私たちは「キリストのからだ」である教会に属しており、地域教会を愛することを求められています。その教会に祈られ、送り出されて、学内においても「キリストのからだ」の交わりを建てあげていくのがKGKなのです。

ですから、KGKにおける「超教派」の交わりにおいて、「自分たちの信仰のルーツこそが正しい。あなたの教会は間違っている」という態度をもってはなりません。また「誰とでも何でも一緒にやればいい」と乱暴な議論をしてもいけないのです。来るべき日にはキリストが再び来られ、全ての教会は一つになります。その日に至るまで、私たちは自分の信じる場所（信仰告白）を誠実に生きていくより他にないのです。

私たちは信仰告白（KGKでいう信仰基準）においてのみ一致するのです。異端の人々の信仰とは一つになることは出来ません。私たちの交わりの中心にあるのは、神のことばを信じる福音主義信仰です。

そして守るべきことは、自分の出席している教会が「若者が多いから」「おもしろいイベントがあるから」といって、軽々しく他のキリスト者を自分の教会に誘ってはなりません。その人がその教会に召された意味（キリストのからだとして集っている意味）を問う機会を奪ってははいけません。その人は今出席している教会で、既にその教会の体であり、器官なのです。自分に召された教会を愛し、仕えるべきなのです。違いの理由を真剣に聖書から考えることは、自分の教会の信仰のルーツを知る機会にもなります。自分の教会の背景を深く知り、自らが属している教会を愛する者は、他の教会を簡単に裁いたり、評価したりすることをしません。むしろ謙遜と尊敬をもって、違いを認め、他の教派から学ぶ姿勢を与えられます。お互いの違いを大切に愛することを、KGKの交わりの中で学びましょう。

また出席教会を転々として、教会のからだとして留まらないこともいけませんし、その教会に導かれた主の計画と御心を思い巡らすことなく、教会に出席することを止めたり、他の教会に安易に移ることもやめましょう。また、KGKの交わりの中で教会内の問題を配慮なく批判することは愛の行為ではありません。

今あなたが属している教会の祈り会に是非出席してください。そして自分たちの学内活動のために教会の方々に祈ってもらうことをお勧めします。

Study Four

学生主体

深みに漕ぎ出し、網をおろせ

ルカによる福音書5章1-11節

学生主体とは「神の召しに応答するのは、学生であるあなた自身」というスピリットです。今回はKGKの学生主体について学んでいきたいと思えます。

1. 「学生主体」の反対のことばは何だと思えますか？
2. 漁師経験者であるペテロが、漁の素人のイエス様に「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚を取りなさい」と言われたとき、どんなことを感じたでしょうか？（4節）
3. 長年の経験上、今日の漁は無理だとあきらめたペテロでしたが、なぜ「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」と言うことが出来たのでしょうか？ペテロはこのことばの前に何をしていましたか？
4. 私たちの経験上、何も取れない（福音を宣べ伝えても誰も聞いてくれない、救われる人が起こるように思えない）ように思うとき、イエス様の常識を超えた、人間的な現実には挑戦してくるようなことばを聞く

と、どのような思いにさせられますか？自由に話し合ってみてください。

5. イエス様の語られた「深みに漕ぎ出せ」という「深み」とは、私たちの何をさすことばだと思いますか？
6. 「でもおことばどおりに」と、あえて深みに漕ぎ出す主体性を生み出したのは、「おことばどおり」という信仰でした。そのとき、ペテロたちの舟はどうになりましたか？
7. あまりにも多くの魚がとれて網が破れそうになった時、ペテロたちがとった行動はどのようなものでしたか？（7節）あなたにとっての仲間とは誰のことですか？
8. 8節であまりにも多くの魚が取れたとき、ペテロがイエス様の前でとった行為はどのようなものでしたか？
9. この箇所から、「学生主体」について教えられること、発見できたことを分かち合ってください。

この箇所は学生主体について、4つのことを教えてくれます。

まず「学生主体」とは、「神のことばに聞き従う学生の主体性」ということです。学生が神様のみことばに聞き「おことばどおりに」と神のことばに従うことがなければ、この「学生主体」というスピリットは、学生たちの単なる自己中心の告白となってしまおうでしょう。「学生主体」のスピリットとは、主体的にみことばに応答する学生の信仰を表しています。

KGKの活動の中心は、「聖書研究会」です。聖書研究会では、誰か聖書に詳しい人がやってきて学生たちがその教えを請う、というものではありません。学生たちが自らの目と頭と心を使って、主体的にみことばを読み、分かち合い、従うのです。ここには受身な姿はなく、みことばに対する主体的な信仰の姿勢があります。まさに活動のあり方そのものに、「主体性」が表れているのです。

次に「学生主体」とは、「伝道の主体は学生」だということです。KGKにおける伝道は「学生が学生に」伝道することなのです。漁はペテロに任されたフィールドでした。しかし任されたフィールドという場では自分の経験が先立ってしまいます。あなたが今自分の友人たちを思い浮かべるとき、「信じそうにないなあ」と思うかもしれません。ペテロにとってイエス様のことばは何年も漁をやってきた自分の経験からすると無理なことでした。しかし彼は「深みに漕ぎ出しなさい」というみことばを信じたのです。自分の経験や価値観で判断するのではなく、深みに漕ぎ出して網をおろしたのです。深みとは、光が届かず、目に見えにくい場所です。自分の判断や経験で測ることの出来る場所ではなく、自分の足で立つことの出来ないところです。ペテロは自分の既成概念をはるかに超えたところに漕ぎ出し、網をおろした時にその網が破れそうになるほど魚が入ったのです。どんなに拙い網であろうと、神様は神のことばに従う者に祝福を与えて下さいます。しかし、この網はあなたの網であり、あなたが網をおろさない限り、この魚を手に入れることは出来ないのです。

さらに「学生主体」とは、「主体的に神に従う学生によって形成される交わりによる伝道」です。ペテロは自分の網が破れそうになった時、仲間の船を呼びました。あまりにもすごい祝福に興奮しながら、イエス様の御業と一緒に見る仲間を呼んだのです。祝福を知った学生は、恵みを自分一人のものにはしません。その恵みを自分と同じキリスト者学生の仲間に伝えます。KGKが60年以上続いてこれたのは、この

スピリットを「継承」する先輩クリスチャンがいたからです。伝道は本質的に一人でするものではありません。多くのキリスト者がそのプロセスに関わることによってできるものなのです。主事もその先輩の一人です。主事は指導者ではありませんから、KGKでは先生とは呼ばれません。主事は学生主体を損なうことなく、共に網をおろす同労者として学生の皆さんに寄り添い働く存在です。

最後に、「学生主体」とは、「仕え合う生き方によって継承され続けるもの」です。ペテロは主のことばに耳を傾け、主のことばに従い、深みに漕ぎ出して網をおろし、魚がたくさん取れた時、イエス様の足元にひれ伏しました。自分の力ではないことを知り、ただただ主の前にひれ伏したのです。むしろ自分の罪深さに気づかされたのです。本当の意味で主体的な信仰とは、その人を神の前に謙遜にさせます。「学生だけでやっているんだ」という高慢さではなく、「神様にさせていただいている」という謙虚さが与えられます。そしてこのような姿勢の先輩が、後輩にKGK運動を語り継いできたのです。主に仕える先輩の姿勢、主体的に神に従う姿勢が、後輩たちを育てます。KGK運動は、学生の生き方が他の学生に影響を与えることによって、継承されてきたものなのです。

Study Five

地の塩、世の光

マタイによる福音書5章13-16節

「全生活を通しての証」とは、KGKスピリットの実りだと言うことができます。今までの聖研を思い起こしながら、学びを始めていきましょう。

1. 今までの学びの中で、心に残っているのはどのようなことですか？
2. 13節を読みましょう。イエス・キリストは、「地の塩」にどのような意味を込めて私たちに語られたのでしょうか？「地」ということばと、「塩」ということばの持つ意味を考えてみましょう。またコロサイ人への手紙4：5-6を開き、私たちの使うことばについても考えましょう。
3. キリスト者が「塩けをなくす」とはどのような状態になることでしょうか？「役に立たない」状況、「外に捨てられ」「人々に踏みつけられる」状況とはどのようなものかを話し合ってみましょう。
4. 14-16節をもう一度読みましょう。イエス・キリストは「世界の光」にどのような意味を込めて語られたのでしょうか？「世界」ということばと「光」ということばの持つ意味を考えてみましょう。ヨハネ1章を開き、イエス様ご自身が「光」であることから考えてみましょう。

5. 隠れることの出来ない「山の上にある町」とは、周りからはどのような存在として見られているのでしょうか。「家にいる人々全部を照らす」ことができるとは、どのような存在だと言えるのでしょうか。
6. 柀の下に置くと、光はどうなりますか？それはキリスト者の生活がどのようになることでしょうか？
7. 「良い行ない」とは、道徳的な意味というよりも「美しい仕事（わざ）」という意味を持っています。私たちの「美しい仕事」とは、私たちの弱さ、罪深さの現実の中で、どのようなことを意味するのでしょうか？天におられる父なる神があがめられる行いとは何でしょうか。
8. 「山上の垂訓」と呼ばれるこの箇所では、すべて「あなたがた」と複数形で呼びかけられています。KGKでは「人格的な交わり」を大切にしています。「地の塩」「世の光」であるとは、皆さんの交わりがどのようなになっていくことだと思いますか？
9. KGKの「全生活を通しての証」とは、未信者の友に、人格的な交わりの中で伝道することです。「塩」「光」として生きるとは、皆さんの友人との関係において、どのような生活をするををさせているのでしょうか？

That's KGK Movement ←

KGKスピリットに共通しているのは、生き方を通して証しをすることの大切さです。KGKには特色ある伝道手段やマニュアルはありません。KGKでは、生活全体を通して、キリスト者としての自らの人格そのものを通して証しをすることを励まし合ってきました。もちろんことばを通しての伝道をしなないという意味ではありません。しかし口だけではない、

生活を通して、人格を通して証しをすることは、嘘のない伝道であると言えるでしょう。私たちの生活に嘘があるならば、いくら口だけ立派なことを言ったとしても、伝えられた側には立派なことばの向こう側が見えて見えないものです。

イエス・キリストは、「あなたがたは地の塩です」と語られました。「塩になりなさい」と言われたものではありません。既に救われ、キリスト者となった私たちの救いの事実を、全生活で現わしていくことが求められています。まだキリストに似た者には程遠い自分自身がいたとしても、悔い改めることを避けず、罪が赦されることから逃げず、きちんと神の隣りに従って生きる時に、私たちの生き方を通して天の父があがめられていくという約束を、私たちは受け取っているのです。

ですから大胆に証しをしましょう。こんな者さえ救いに入れてくださった神様の恵みを、「地の塩」「世の光」として、この地に、この世界に、人々に伝えていきたいと思えます。

KGKでは、恋愛、結婚、性について、聖書的労働観、就職について、また信教の自由を守る告白や日本の歴史の問題にも取り組むことを励まし合います。それは、「塩け」を失わずに、全生活を通して証をするために、生みだされてきた活動です。私たちの生活の全領域において「イエスは主である」という告白に生きようとする営みなのです。

恋愛や性のテーマにおいて「聖書はそう言ったとしても、現実はい…」と言いやすくなりがちです。仕事を始めたとき「世の中じゃクリスチャンの生き方は通用しないよ」ということばの前に挫けてしまいそうになることもあります。過去の日本の歴史の中で起こったように、再び信仰を公にするのが困難になるような現実が、足音を立てて近づいてきています。この世界の中で「地の塩」「世の光」となることを、KGK運動を通して学び、求め続けましょう。そして、自分のことばで、自分の全生活で、信仰告白が出来るようになるように祈り、願い続けたいと思えます。これこそ聖書的世界観をもって生きることなのです。

KGKの最後のKは「会」（交わり）です。この「会」とは、交わりを通して証しをすることを告白する、KGK運動の核のような部分です。私たちは一人でこの証に生きるものではありません。生涯に渡る信仰の友人をKGKで得ていきましょう。ゆるしあい、愛しあい、祈りあう交わり。世の中のどこを探しても見出すことの出来ない、キリストによってなみなされる人格的な交わりを通して、KGK運動を続けていきたいと思えます。

あとがき

この聖研テキストは、KKG は何か、ということを経書から学ぶために用いられることを願っています。KKG が 60 年にわたる歩みの中で告白してきた KKG スピリットを学ぶためのものです。

KKG スピリットとは、「KKG が決して譲れないもの、譲ってしまえば KKG が KKG でなくなるもの」と言い換えてもいいかもしれません。あるいは「KKG が歴史の中で戦い抜き、守り抜いてきたもの」と言うことも出来るでしょう。それはそのまま、遣わされたキリスト者のスピリットと呼んでよいのではないのでしょうか。

KKG スピリット「派遣意識」「福音主義」「超教派」「学生主体」「全生活を通しての証」、いずれのことばも聖書に出てくることばではありません。しかしそのどのスピリットも聖書から生まれ出た告白なのです。今回学んだ聖書箇所以外からも、KKG スピリットが告白されています。私たちはこれからも聖書全体を読み続け、生活全体を通して、福音の豊かさを KKG 運動で証していきたいと思ひます。

この KKG スピリットの中に、私たちがなぜ KKG をするのかという理由があります。もしこの理由が聖書に根ざしていないとするならば、時に KKG 運動はつまらない集まりとしか思えなくなるかもしれません。もし「たぐさんの友たちに出会えるから」という理由で KKG に参加しているならば、先輩たちの多くが卒業してしまつた後に一人きりでその学内活動を担っていくことに何の意味も見出せなくなるかもしれません。

各学内、各地区でこの聖研テキストが用いられることを願ひつつ。